



全国の「読む会」からのおたより

想うこと・考えること

後藤敏夫(余市)

余市恵泉塾では、毎月第1主日の午後に『無者キリスト』を読んでいます。参加者は小樽集会の人々を加えて60人を超えます。

水谷先生は、いわば楽譜通り原曲の息づかいに忠実にテキストを読みながら、ご自分の息で自由な変奏や即興をかなでられます。そこに水谷先生の著者への深い理解や感謝、また神の人であるお二人が同じ福音を生き、同じ自由の霊で歩みながら、異なる道程を辿られたことをも感じます。

小池辰雄という稀有な信仰者に、率直に言って私は天才を感じます。人間の現実や限界を突破した向こうに広がる山上のような清涼の気、真っ青で何もないただ光だけが満ちている雲上の空のような信仰世界は、私には今なお辿りきれない道です。と同時に、そこにひとりの主人公がその内的な必然性に促されて、自分を取り囲むさまざまな外的な状況と戦いながら、次第に自分の道を切り開いて自己を突破してゆく、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』を典型とするドイツ文学における「ビルドゥングス・ロマンス」(「教養小説」、「人間形成の小説」)を感じ、小池氏が描く「無者キリスト」に、史的イエスよりも宗教的探求者の詩的イエスを感じます。

ガラヤ湖の嵐の中で、舟のともに枕して眠るイエスに象徴される一種の個人的理想主義は、歴史や社会の嵐の中では、世界の神の民につながる主への信仰告白を生むよりも、単独者の諦観に似た超然とした境地に至るのではないかという不安は、私自身の信仰の課題でもあります。

小池氏と水谷先生がともにする福音の事件(出来事)、すなわち神の側からの突破としての霊的体験と、それに呼応する人間の側からの突破による徹底した信の世界において、私たちの内に形づくられるキリスト(ガラテヤ 4:19)に、両者の違いをも感じながら、2つの突破の間を吹く息吹や氣息(ルーアッハ／プネウマ)を、凡愚への教育(ビルドゥングス)として受けとめています。



図書室便りは偶数月発行です。
本図書室は献金で運営されています。

小池辰雄を読む会

●余市

2013年6月2日(日)13:30~15:00

2013年7月28日(日)13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌

2013年7月5日(金)14:00~16:00

札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

*6月はお休みします。

●帯広

2013年7月30日(火)14:00~17:00

帯広市西 22条南 4丁目 31-11

*会費:無料

*連絡先:0155-36-8626(西島)

*6月はお休みします。

●北見

*しばらくお休みします。

●都賀

2013年6月15日(土)10:00~12:00

2013年7月13日(土)10:00~12:00

千葉県若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(佐藤)

*準備の都合上、出席のご連絡をお願いします。

*お手洗いが大変混みます。事前におすませください。

●神戸

2013年6月16日(日)14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸パイブルハウス

*会費:500円(自由献金あり)

*連絡先:090-9256-4841(田中)

*隔月開催のため、7月はありません。

*予習不要・初心者歓迎

見知らぬ人

前回の「婚約」を読みながら、「いよいよ、地上の生活なんかはどうでもいいと思うことが強くなった」と書き記す青年に、はからずも心動かされ、これは私の「見知らぬ小池辰雄」だと思った。

都賀の「小池辰雄を読む会」では、たびたび水谷さんから「生前の小池先生の話」と振られる。五十年以上一緒に暮らしたのだから、よく見知った父の思い出はいくらでもあるが、私の知っている小池辰雄は、「地上の生活者」としてきわめて幼い男でしかなく、「神のご用の道具」となった姿ではない。

たとえば、私が深夜に仕事を終えて帰宅すると、たいてい父が「おかえり」と玄関を開けた。鍵というものがないわが家の玄関は内側からしか開かないので、「ピンポン」と押すと、まるで待っていたかのようなタイミングで父がドアを開けるのだ。私が五十歳をすぎても、それは変わらなかった。

たまたま深夜まで書きものをしていたのではない。おそらく息子が帰るのを待っていたのだ。「今日は忙しかったのか？」と言いながら傍らに座って、酔い覚ましに冷蔵庫からその夜の食事をとりだす私と一緒に箸をとる。そこへ妻が二階から起きてくる。「おかえりなさい」と言いながらお茶を入れる。「私も飲もう」と父が言い、妻は、父と私のお茶を入れると黙ってまた二階へ引っ込んでしまう。深夜の居間に、父と、ゆえなくいらだっている私がいる。奇妙な光景であった。

これが私の見知る小池辰雄である。彼は、深夜に帰ってきた夫の傍に座ろうとしている妻に思いが至らなかった。そればかりか、深夜に仕事を終えた父は、「信雄は帰ったのか？」と新婚の私たちの部屋のドアをなんのためらいもなく開け放ったものだ。それがどのくらい人の心を不安にするのかはまったく気づかない。「あ、失敬」というだけで、何度も繰り返す。

小池辰雄は文学とは無縁だったと前々回書いた所以である。

「いよいよ、地上の生活なんかはどうでもいいと思うことが強くなった」という二八歳の青年小池辰雄は、それっきり地上生活者としては成長しなかったのではあるまいか。前回の「婚約」を読みながら、そんなことを思った。地上生活者は成長しなかったが、『無者キリスト』を書く小池辰雄の萌芽をここに見る思いがする。

そう思いながら、記念図書室に飾ってある小池辰雄の学生時代の写真をしげしげと見る。なぜこの青年はかくも怖い顔をしてにらみつけるのか。ベートーヴェン

が大好きだった彼は、ベートーヴェンのような顔を模するのが一つの気取りだったのだろうと思うが、ひょっとすると、あの写真のままのどっつきにくい真面目人間であった可能性も高い。

当時の日記を見ると、毎日、聖書、カント、ダンテ、アウグスティヌスを読んでいるとある。読書というのは西欧の「原書」を読むことであり、カントはドイツ語で、アウグスティヌス、ダンテは英語訳を読んでいた。巷では、夏目漱石全集の刊行が始まり、文学青年はごく当たり前に漱石を読んだのだろうが、小池青年はこうした俗書に気を取られるのを墮落と考えたようだ。厳しく自己を律して、「くだらない人間」には絶対ならないように、勉強に勉強を重ね、自らをエレミヤに擬している意志の強い青年である。

ダンテを読むためにはイタリア語を、アウグスティヌスを読むためにはラテン語を、そして何より聖書を読むためにヘブライ語、ギリシャ語をマスターしなければならないと誓っている青年。私がかつとも苦手とするタイプである。

この青年は、はたして周囲の者から好かれたのだろうか？

「自分は正しいことを言っているのに、周囲の者は何もわかっていない」。

にらみつけている青年はそう言っているように見える。婚約者に好かれる自信はどこからきたのだろうか？あるいは自信は全くなかったか。

小池辰雄にとって「結婚」とは、何であったのだろうか。前回の「婚約」を読む限り、明快な決意表明に見えるのだが、私にはその明快さの故に不安におののいている青年が思い浮かぶ。



図書室に飾られている大学時代(1927年)の小池辰雄